衣服の留め具について

宮　木　利　子
奥　平　志づ江

1．は　じ　め　に

腰蓑程度の原始的のものから、布を縫合せた複雑な近代衣裳にいたるまで、肌の露出と着衣の脱落を防ぎ、体に着衣を密着させるために色々の留め具が用いられてきたが、その中で最も基本的な最初のものは紐、ベルト、ストラップ、バンド等の帯類である。もっとも帯状の衣服（印度のサリー図1）や、その一部で全体を緊締する場合には、別に止め具を必要としないこともあるが、本稿では局部的な留め具の色々について若干歴史的な観点から比較考察してみた。

図1　インドのサリー

図2　腰衣型（ロインクロス）

2．留め具としての紐について

古代エジプト人（紀元前3000年頃）は石の建造物の表面に彫りこまれている壁画等で知られるとおり、リネン（麻布）の短い腰布の布端を上部にはさみこんで着装していた。（図2）

その後紀元前1500年頃には着丈の長さの二倍に相当する布を中央で二つに折り、その真中に貫頭孔をあけ、両脇は袖の部分を残して縫合せた一種のポンチョ（PONCHO・貫頭衣）が着用され、その上に帯状の布で体を締めていた。(図3)　紀元前1000年頃にはタイトなチュニック（TUNIC）で衿元は紐じめにする様に工夫したものが見られる。(図4)

図3　貫頭衣（ポンチョ）

図4　チュニック

3．ブローチ等

ブローチ（BROOCH）は元来えり留めや胸飾りの留め針のように留め具であったものが、装飾品として衣服のアクセサリーに変ってきたものである。古くはスコットランドの軍人の「えり下飾り」やピサンチン時代（紀元550年頃）のヨーロッパの貴族が着たクロークに付ける矩形のタブリオン（飾り布）を止めるのに使った留め具等がある。(図5)
バックル（BUCKLE）は、元来びじょう金や帯留めのような締め金具として作られたものが、装飾的な帯金具に変ってきた。古くは中国大陸で紀元200年頃に用いられたのが古墳の発掘品で発見され、日本には紀元400年頃に伝わってきたようである。またヨーロッパでは紀元1200年頃に貴族（兵士）がベルトをしめるのに用いた例が見られる。(図6)
ブローチ、バックルの素材としては、真ちゅう、鉄、皮、絹、金、銀、天然石等が広く用いられている。

図5　ピサンチン時代のブローチ

図6　兵士の服装

4．ボタンについて

ボタン（BUTTON）の由来は紀元前1500年頃、未開発時代のヨーロッパでゲルマン民族が衣服を肩で止めるために用いたボトン（BOTON）であるとも言われる。中世紀のヨーロッパでは肩先や胸元をブローチや

ピンで留めていたようである。ルネッサンス時代になって使われはじめたボタンはさらに一般化し実用度を増してきたが金、銀、象牙などで造られていたため貴重な装飾品として扱われたようである。又紀元1580年頃のスペインモードの男子服の上衣にボタンが用いられているのが見られるのは、この頃すでにボタンがかなり普及していたことを示すものである。(図7)　日本でボタンという名が用いられたのは徳川末期といわれ「脚絆」などにつける留具はオランダ人の装束から出たものといわれる。ポルトガルでは「ブタン」といい、日本ではボタンと呼ばれたということである。

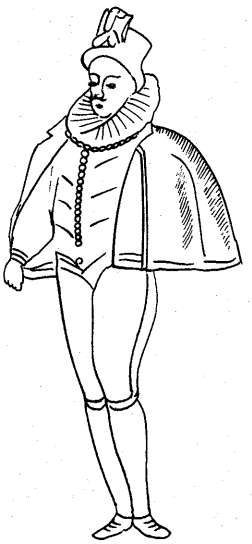

図7　スペインモードの男子服

5．スナップとホック

スナップ（SNAP）はスナップキャッチ式（パッチンと止める）の締め金、留め金、びじょう金のことで、19世紀末に機械好きのドイツ人によって発明されたと伝えられている。スナップの利点は、ボタンに比べて、小さな部分にも使用でき、着脱が便利で布地を傷めないことである。又素材も、従来はほとんど真ちゅうであったが最近は合成樹脂製のカラースナップが大分使われるようになり、衣服の地色との調和と装飾性を一段と増すようになった。

ホック（HOOK）は鈎と留め具（HOOK AND EYE）によって機能するもので、スライド・ファスナーの終端の締め具として、組みで使われる場合もある。又1個のホックと2ツ以上の留め具をつけて2段、3段と留める部位を変えることもできる。(図8)

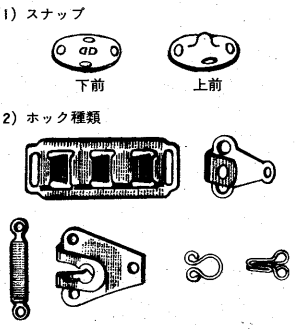

図8　スナップとホック

6．その他のファスナー等

(1) スライド・ファスナー

スライド・ファスナー（SLDE FASTNER）は単にファスナーとも呼ばれているが、英、米ではジッパー（ZIPPER）が最も普通の呼名である。又日本ではチャック（CHUCK）ともいう。(図9)　メタル又はプラスチック製のペアーの務歯（TEETH）と締め具（CHUCK）の組み合わせを布地に取り付けたも

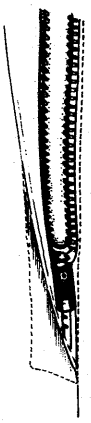

図9　スライド・ファスナー

ので、チャックをムシに沿って滑らせることによって、ムシの両側にとりつけた布を開閉するものである。これは約80年前に開発された衣服の締め具であり、最近まで真ちゅう、鉄等の金属製のものだけであったが、ナイロン、テトロン、デルリン等の合成樹脂製のものが大分出回るようになり、布地や衣服の種類、機能、目的にあわせて選択できるようになった。金属製と合成樹脂では一長一短があり、前者が堅く、重く、堅牢で滑りがよいのに比べて、後者は軟かく軽いが、やや滑りが悪く弱い(開閉に力が要る)。また、金属は導電性があるのに対して、プラスチックは開閉時の摩擦による静電気の発生が考えられる。最近ではカラード・ファスナーも多く、布地の色にあわせて選ぶことができ、又ファスナーを目立たないようにかくしたコンシールド・ファスナー(CONCEALED FASTNER)も開発されている。

(2) ベルクロ・ファスナー

これは通常マジックテープといわれるものでフック(HOOK)とパイル(PILE)のタオル状布地の組合せからなり、フック面の鈎状の繊維がパイル面の「わな」状の繊維にかかり合って締まる仕組みになっている。(図10)これは15年程前にスイスで開発されたという話であるが最近ジャンバー、スカート、赤ちゃんのオムツカバー、国鉄客席のカバー止め、その他広く使われるようになった。操作が簡単(指で圧着するだけ)なため、スナップ、ファスナーに取って替わる勢いであるが、接着の強さと、洗濯による衰え、寿命にまだ難点がある。但し取付けが簡単(ミシン縫等)で、裁断のサイズがフリー、重ね合せの大きさ、個所が自由で調整容易等、多くの利点を備えている。

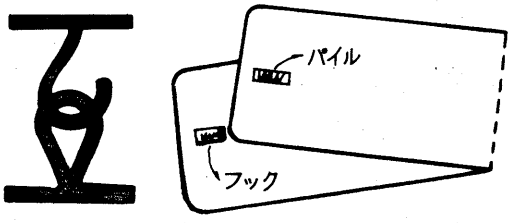

図10 ベルクロ・ファスナー

7. むすび

以上主として洋服の留め具類について述べたが、①留める、締める、開く、閉じる、密着性等の機能性、②コスト、取り付けの難易、耐久力等の経済性、③色彩、形状、衣服との調和などの装飾性、④その他の形状、材質による保健性等によってそれぞれ長短があることがわかる。したがって留具類の選択は、当然その使用目的とこれらの要素のいづれに重点をおくかによって、きまることである。またデザインと使用目的のバリエションを出すため、これらが個々に(ホックと紐)又は段階的、機能的に(スライドファスナーとスナップ、ファスナーとホック等)組み合せて使われている。今後も新しい留め具類が開発される可能性はあるが、いづれにしても、前記の長所を多く兼ね備えたものが永続して愛用されることであろう。又これらの留め具を必要としない繊維、材料(例えばオペロン、ゴム布等)の開発も装飾性、機能性とのかね合いで進んでゆくものと考えられる。

参　考　文　献

1．服装大百科事典　　文化服装学院出版
2．服飾事典　　田 中 千 代 著
3．ファッション　　ミラ・コンティーニ著
4．目で見る大世界史　　国 際 情 報 社
5．服装の歴史　　ハニー・ハランド・ハンセン著
6．被服文化　No.79　　文化服装学院出版
7．被服文化　No.80　　文化服装学院出版
8．衣生活１９６９年１１月
9．衣生活１９７１年　７　月